

# 笹田傳左衛門の新徳寺への寄進を追って ～田楽村の笹田家との絆～

富中昭智

## 1 はじめに

田楽の笹田傳左衛門については、『春日井郷土史 第7号』に掲載された拙稿[1]で紹介した。そして、かつてこの笹田傳左衛門に関心を寄せて、論文への整理をすすめていた入谷哲夫氏は、「すしの話」[2]のなかで笹田家の菩提寺である新徳寺への寄進について触れている。しかし、残念なことに「多額のお布施や仏具など」と書かれているだけで、詳細については不明だった。マルカン酢の社史[3]にも、新徳寺のことが書かれているが、上田楽の笹田本家が菩提寺である新徳寺に対して檀家として支援を続けているとあるのみで、具体的なことは書かれていない。

私は、笹田傳左衛門について調べるうちに、それら寄進したものがどういったものなのか具体的に確認してみたいと考えるようになっていた。もし、それが確かであれば、『名古屋市史（産業編）』に記載されている笹田傳左衛門が養子に入った親の在所が「楽田村」でなく、「田楽村」であった証明が、伊多波刀神社にある常夜灯に加えて補強される[4]からだ。

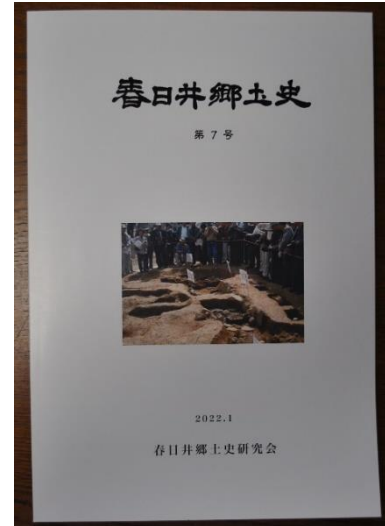
そこで、今回の論文では、次のことについて追究したいと思う。

---

笹田傳左衛門が新徳寺に寄進していることは確かか？

確かであれば、何を寄進したのか？

---



『春日井郷土史 第7号』

## 2 笹田家本家の通明氏との出会い

笹田通明氏は、笹田傳左衛門が養子に入った田楽の笹田家の直系の子孫である。この笹田通明氏の紹介で新徳寺への訪問がかなった。

そもそものきっかけは、私が講師を担当した鷹来公民館における「大人の教養講座」で、2年前の2023年（令和5年）7月27日のことだった。担当者から笹田傳左衛門の講座をお願いしたいとのことで、以前、私が『春日井郷土史 第7号』に掲載した論文の内容を紹介してほしいという打診だった。会員には地元の田楽の方もいたことから、私は会員の方たちに田楽の笹田家の子孫の方が健在であることを伝え、もしご存知であれば教えてほしいと伝えた。すると、いくつかの情報を寄せていただくことができない、通明氏と同年8月23日に鷹来公民館で面会することができた次第である。私が笹田傳左衛門について調べている旨を伝えると、快く協力してくださるといふ。そして、通明氏のはからいで、やはり同年10月12日には神戸市からマルカン酢社員2人と春日井市在住の元マルカン酢社員の1人を招いてくださり、通明氏を含めて5人で顔合せをすることもできた。さらに、通明氏とは、私の希望で新徳寺への訪問の約束をしていただくことになったわけである[5]。

### 3 新徳寺へ訪問

新徳寺は笹田家の菩提寺である。春日井市の上田楽町にあり、少林山新徳寺という。宗旨は臨済宗、宗派は妙心寺派。1572年に正雲紹侃（しょううんしょうかん）により創建。本尊は、伊藤次郎左衛門[6]により寄進された千手観音。他に春日井市の文化財を5点所蔵する。地元の地名である「鷹来」の由来となった鷹狩りの際、徳川義直公が休息に立ち寄ったとされる。また、1884年（明治17年）に創業した河田蚕種製造所の河田悦治郎[7]の菩提寺でもある。

### 4 傳左衛門からの寄進

訪問したのは1年半ほど前の2024年（令和6年）7月8日。住職の熊谷滋春氏から本堂でお話を伺った。

住職の熊谷氏から拝見した寄進物は2点。箱書には次のようにある。

#### ① 「大般若十六善神式幅」共

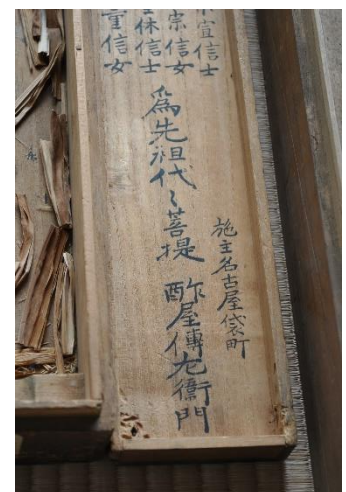
棟山恵梁信士 【笹田家初代：新八】[8]  
家山了珍信女 【笹田家初代：新八の妻】[8]  
釋祐誓信士  
釋貞芳信女  
眞翁宗宣信士 【清六の弟：笹田傳左衛門2代目の父】[9]  
釈貞宗信女  
罷翁全休信士 【笹田傳左衛門2代目】[9]  
釈需量信女  
施主名古屋袋町 爲先祖代々菩提 酢屋傳左衛門  
文政元戊寅六月日 少林山新徳禅寺 付具



「大般若十六善神式幅」



収められている函



確かに酢屋傳左衛門とある

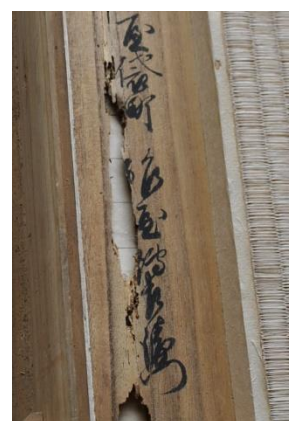
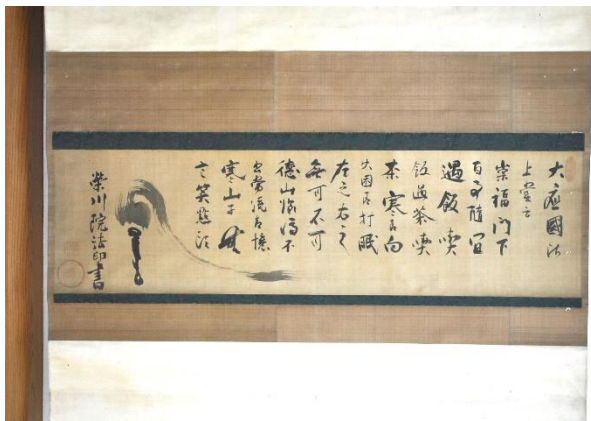
一般に、「釈迦十六善神像」と呼ばれるものである。国立大学法人奈良女子大学公式HP[10]によると、「玄奘が訳した『大般若経』六〇〇巻を転読する儀礼（般若会）の本尊として掛幅画が奉掛されたり、あるいは『大般若経』を納める経箱や厨子に描かれたりした」とある。十六善神とは、大般若

経を守護する十六体の神々で、夜叉神とも言われる。中央に釈迦如来を中心に、文殊菩薩、普賢菩薩の三尊、その周囲に十六善神、右下に玄奘三蔵、左下に深沙大將が描かれる。釈迦三尊は釈迦如来のみの図もある。通常、除災招福を祈って描かれる。

新徳寺のこの掛け軸の絵は、笹田傳左衛門が養子に入った笹田家の先祖代々の菩提を弔うために、笹田傳左衛門から新徳寺に寄進されたものである。「文政元年戊寅六月日」とあることから、1818年6月である。衰退した岡田家を合併したのが1816年[11]であることから、その合併直後であり、3代目の笹田傳左衛門だったことがわかる。

② 「榮川院法印書」

癸 文久三年  
 寅（亥）六月吉日  
 尾州名古屋袋町 酢屋傳左衛門



「榮川院法印書」

収められている箱

酢屋傳左衛門とある

大応國師	南浦紹明（1235～1308）臨濟宗の僧	太宰府崇福寺に住持する
上堂云	法堂で説法を行った	
崇福門下	崇福寺の門下には	
百事随宜	あらゆることについて合わせて臨機応変にしろ	
遇飯喫	飯があれば飯を食べ	
飯遇茶喫	茶があれば茶を喫む	
茶寒即向	寒ければ火にあたり	
火困即打眠	疲れば眠る	
左之右之	思ったようにすることは	（状況に応じて対応することが大事）
無可不可	日常のことである	（常に真理を追求しろ）
徳山臨濟不	徳山と臨濟の逸話のように	
出常流即憶	流水は腐らず（淀んだ水は腐る）と憶えておきなさい、と	
寒山子無	崇福寺門下は（榮川院には修行僧達が寒山子のように見えたのだろう）	
言笑點頭	何も言わず、笑わず、うなずいた	
榮川院法印書	狩野典信（1730～1790）	

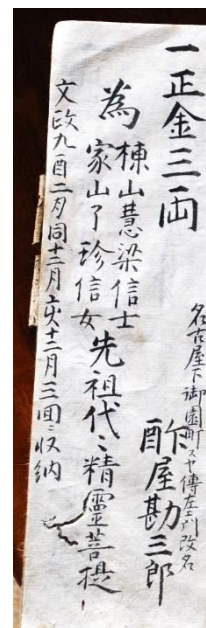
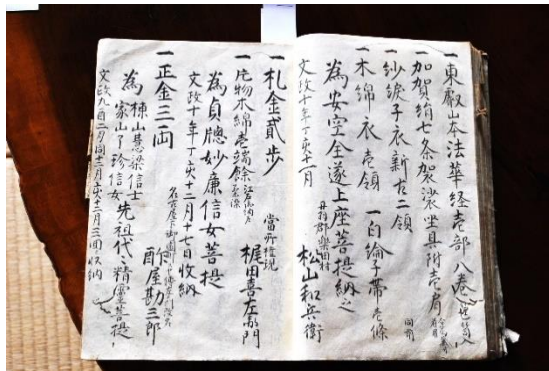
臨濟宗の僧である南浦紹明の説法をもとに禅宗の真髓を説いたものである。「文久三年癸亥（亥）六月吉日」とあることから、1863年6月である。よって、これは6代目の笹田傳左衛門[12]であることがわかる。箱書きに寄進した理由は書いていない。なお、訳については、春日井古文書研究会の元会員である稲田義和氏と新徳寺の住職である熊谷滋春氏にご教示を受け、細かな部分の解釈は富中が行っている。

## 5 寄進の記録

ここには、記録の中から寄進物と笹田傳左衛門（酢屋勘三郎）の名前が明記されているものを掲載する。

③正金三両 名古屋下御園町スヤ傳左エ門改名 酢屋勘三郎

爲 棟山慧梁信士  
家山了珍信女 先祖代々精霊菩提  
文政九酉二月同十二月癸（亥）十二月三回ニ収納



「文政九酉二月」「同十二月」は、1826年の2月と12月のことだが、文政9年は丙戌（ひのえいぬ）であるので酉ではない。よって、前年1825年の2月と12月の可能性がある。癸（亥）十二月は、文政十年が丁亥（ひのと）であるので、1828年12月だろう。いずれにしても、このあたりで、3回にわたって「正金三両」が寄進されたことが記録されている。

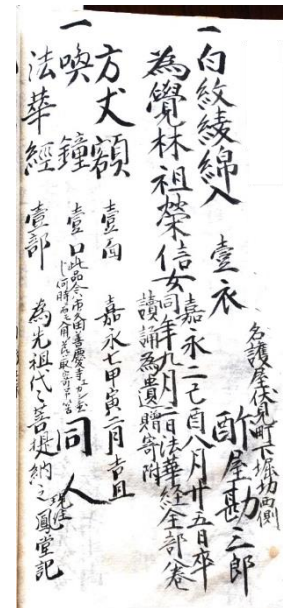
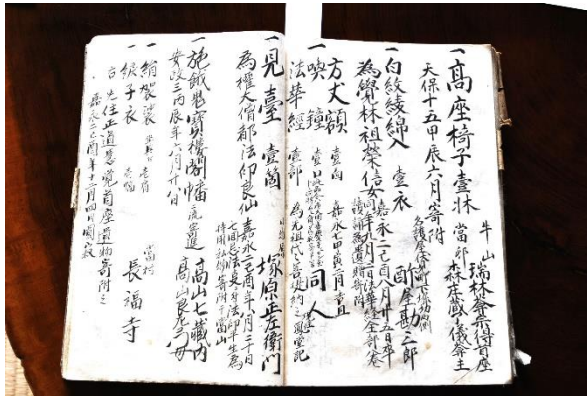
よって、この笹田傳左衛門は3代目であり、岡田家を合併したことから酢屋勘三郎と改名したことも示している。特筆すべきは住所が①では袋町とあるのに、この③では御園町となっていることだ。

寄進の目的は、棟山棟山慧梁信士【笹田家初代 新八】と家山了珍信女【笹田家初代 新八の妻】の菩提を弔う（先祖供養）のためである。

④白紋綾（糸偏に麦：綾の異字体）綿入 壹衣 名護屋伏見町下堀切西側 酢屋勘三郎

爲 覺林祖榮信女 嘉永二己酉八月二十五日卒  
同年九月二日法華經全部八巻  
讀誦爲遺贈寄附

- ⑤方丈額 壹面 嘉永七甲寅二月吉旦 同人  
 喚鐘 壹口 此品今ハ市ノ久田善慶寺エカシ呈  
 之何時ニ而モ入用ノ節ハ取寄マヤ筈  
 法華經 壹部 爲 先祖代々菩提納之現住鳳堂記



④「白紋綾（しらもんあや）の綿入 壹衣」は地と紋を白色で織り出した織物のことで、綿入は表地と裏地の間に綿を入れた着物のこと。半纏のことだろうか。これを覺林祖榮信女（酢屋勘三郎の娘）のために寄進したとある。「嘉永二己（ママ）西八月廿五日卒」は1849年8月25日に逝去したという意味であり、同年9月2日というから初七日法要に法華經全部8巻と読誦（どくじゅ）を遺贈寄附（死後に寄附すること）として寄進したようだ。

「名護屋伏見町下堀〇（土偏に力：下堀切のことだろう）西側 酢屋勘三郎」は4代目笹田傳左衛門のこと[13]。ここの住所が③の御園町から伏見町となっていることも興味深い。堀切は袋町から少し南に下った堀切筋（現在の広小路通）のことと考えられる。

⑤「方丈額 壹面」は、禅宗寺院の方丈と呼ばれる部屋の前面の壁にかける額のこと。これを1面。「喚鐘 壹口」は、小型の鐘のこと。梵鐘を小さくしたもので、半鐘などとも呼ばれる。これを1口。そして、「法華經 壹部」は、法華經を1部。これらを娘を含め先祖の菩提を弔うために寄進した。「嘉永七甲寅二月吉旦」というから、1854年の2月（④の娘の死去5年後）に、「現住」（当時の住職）である鳳堂和尚（新徳寺第11世）が記したとある。

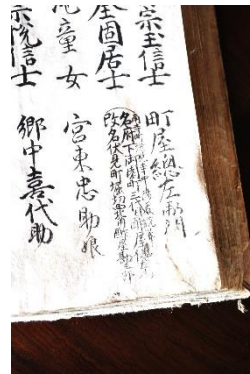
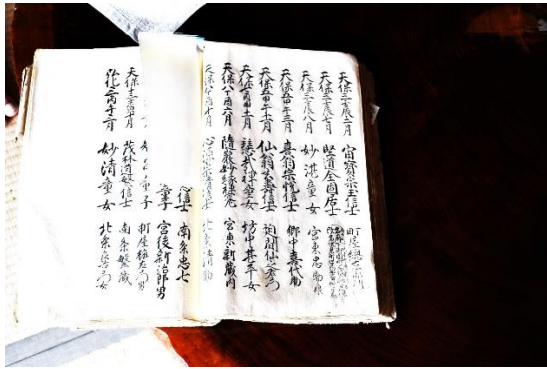
喚鐘についての但し書きに「市ノ久田善慶寺」へ貸している、とある。現在の小牧市の市之久田（いちのくた）にある善慶寺[14]のことだろう。興味深いのは、これはいつ何時であっても、当寺（新徳寺）が必要な時には取り寄せる予定であるとしている点である。

「同人」は④と同じく、名護屋伏見町下堀切西側 酢屋勘三郎（4代目笹田傳左衛門）ということである。奇しくも4代目笹田傳左衛門が亡くなった年でもある[15]。

## 6 過去帳の記録

ここには、寄進ではないが過去帳の中に笹田傳左衛門（酢屋勘三郎）の名前が明記されているところを掲載する。

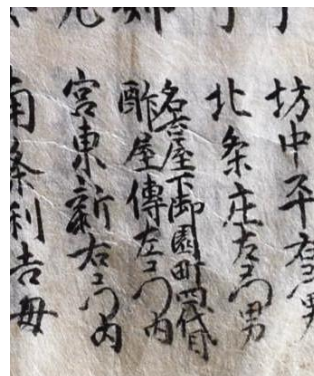
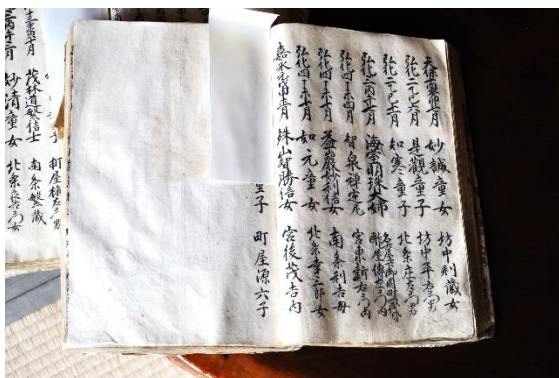
- ⑥天保三壬辰七月 堅道全固居士 南寺町総見中陽院院葬  
 名府下御園町三代酢屋傳左衛門  
 改名伏見町堀切西北角酢屋勘三郎



⑥「天保三壬辰七月」は、1832年7月である。「総見中陽庵院葬」は景陽山総見寺に葬られたということ。この景陽山総見寺は臨濟宗妙心寺派。本能寺の変で亡くなった織田信長の菩提寺でもある。慶長16年（1611年）の清須越しで名古屋南寺町、現在の犬須3丁目に移転した。「南寺町」は名古屋城下、碁盤割から橋町のあたりのことで、現在の犬須界限。

よって、ここは葬られた「堅道全固居士」が「三代目酢屋傳左衛門」であることを示している。これは勿論、3代目笹田傳左衛門のことであり、酢屋勘三郎と改名したことも表記している。これは、彼が岡田家を合併して「酢屋勘三郎」を襲名したことを示している。所は伏見町堀切西北角とある。

⑦弘化三丙午七月 海室明珠大姉 名古屋下御園町四代目  
酢屋傳左エ門内



⑦「弘化三丙午七月」は1846年7月19日のこと。「海室明珠大姉」は、「四代目酢屋傳左エ門内」とあることから、4代目笹田傳左衛門の内儀（家内）、つまり奥さんのことである。酢屋勘三郎の名は使っていないことと、所が下御園町とあるのが興味深い。

## 7 おわりに

笹田家の菩提寺である新徳寺を訪問して1年半ほどがたってしまった。寄進物や記録の解読に思いのほか時間がかかったからだ。この論文の要は、笹田傳左衛門が養子先の菩提寺である新徳寺に、3代目から6代目にわたって寄進をしていたことを明らかにしたことである。伊多波刀神社に常夜灯を寄贈したのは、嘉永5年（1852年）9月としている[14]ことから4代目の笹田傳左衛門であり、他の2人と連名で寄進している。金額にして数十万円といったところだろう。他の寄進したものについても、恐らくこれらと同程度の寄付だったのではないだろうか。これほど長い間、寄進を続けていたということから、田楽の笹田家との強い絆を感じるものである。

他方、傳左衛門は春日井田楽村の養子先である笹田家から分家して名古屋に移住しているのだが、『名古屋市史 産業編』ではこの田楽村のことを誤って「楽田村」としている。今回の論文ではこの記述が誤りであり、春日井の田楽村であったことを補強することになるだろう。

最後になったが、調査についてご理解とご助力をいただいた笹田通明氏と、寄進帳や過去帳の見方などを丁寧にご教示してくださった新徳寺住職の熊谷滋春氏には感謝したい。

令和8年（2026年）3月24日

## 【参考文献】

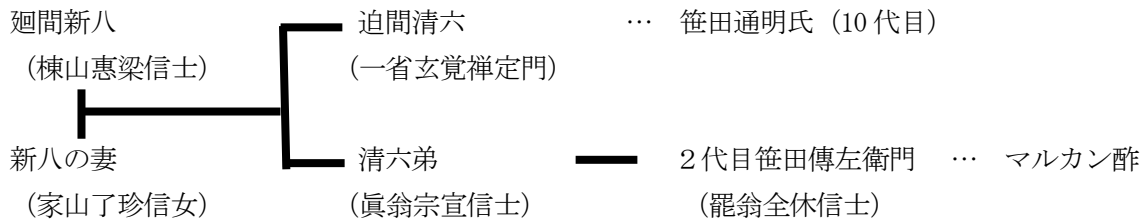
- [1] 「田楽の酢屋 笹田傳左衛門を追って ～宮内庁御用達となったマルカン酢～」『春日井郷土史 第7号』春日井郷土史研究会 2022年 写真はこの論文を所収している『春日井郷土史 第7号』
- [2] <小牧の開拓史話 39> 『つつじ』小牧商工会議所 2018.9 vol. 388
- [3] 「3. 春日井の笹田家」『健康とおいしさ マルカン酢360年のあゆみ』マルカン酢株式会社 2010年
- [4] 「第十四節 醸造物」『名古屋市史（産業編）』名古屋市 昭和55年 復刻版  
「酢は袋町笹屋（ママ）傳左衛門の醸造せるもの古くより名あり、初め春日井郡楽田村に於いて製酢業を榮みしが、其頃より丸勘印の清酢は全國に聲價（声価）を博し、後ち本市（名古屋市）に移り、愈く（いよいよ）事業を擴張し、明治十八年、商法を登録して、専ら純良の製品を出せり、造石高毎年年二萬石にして、販路は廣く全國に及び、更に横濱、神戸より、米國在留邦人の需要に供せらる、」<（ ）は富中>とある。ここにある「楽田」と「笹屋」が誤りであることは、入谷氏によりすでに指摘があるが、具体的にあげられている根拠は伊多波刀神社の常夜灯のみである。
- [5] 場所は私が当時勤めていた牛山小学校の会議室をお借りした。このときにマルカン酢の社史『健康とおいしさ マルカン酢360年のあゆみ』を編集した岩崎尚（いわさき ひさし）氏とお会いした。岩崎氏はすでに退職されたとのことだったが、私はこのときの情報交換で非常に刺激されたのを覚えている。そして、私は春日井や名古屋における笹田傳左衛門の足跡について少しずつでも調べていくことを約束した。
- [6] 伊藤次郎左衛門は名古屋の呉服小間物商「伊藤屋」の当主の名跡。祖先は織田信長に仕えた伊藤蘭丸祐道。明和5年（1768年）に上野の松坂屋を買収して江戸に進出。屋号を「いとう松坂屋」と改めた。1925年に「松坂屋」に名称を統一。現在の大丸松坂屋百貨店。
- [7] 春日井の田楽村の出身。この地に河田蚕種製造所を開設。蚕の新品種を開発し、昭和5年（1930年）に蚕種の生産額が日本一になった。
- [8] 『過去帳』新徳寺と通明氏より受け取っている代々の戒名から新八とわかる。清六とその弟（徳兵衛傳左清八）の父親。詳しくは次ページ<補足>
- [9] 『過去帳』新徳寺 詳しくは次ページ<補足>
- [10] 「釈迦十六善神像」『コレクション名品選』兵庫県立歴史博物館の解説を参考にさせていただいた。
- [11] 「マルカン酢年表」『健康とおいしさ マルカン酢360年のあゆみ』マルカン酢 2010
- [12] 「マルカン酢年表」『健康とおいしさ マルカン酢360年のあゆみ』マルカン酢 2010
- [13] 「マルカン酢年表」『健康とおいしさ マルカン酢360年のあゆみ』マルカン酢 2010
- [14] 善慶寺。新徳寺の末寺のうちの1つ。長谷川安「新徳寺2世荊州（けいしゅう）慧文（えもん）禪師」『郷土誌かすがい 第14号』（昭和57年3月15日）

[15] 「マルカン酢年表」『健康とおいしさ マルカン酢360年のあゆみ』マルカン酢 2010

[16] 「3. 春日井の笹田家」『健康とおいしさ マルカン酢360年のあゆみ』マルカン酢株式会社 2010年 ここには「嘉田永五壬子」とあるが、拓本を見るかぎり「嘉永五壬子」の誤植だろう。

## < 補 足 >

新徳寺の『過去帳』とその註釈、通明氏の先祖の戒名からわかることを整理しておく。



### 過去帳① 廻間新八 「但シ大工」

「清六徳兵衛傳左清八父」とある。4人の子どもがいたことがわかる。清六、徳兵衛、傳左、清八である。

新徳寺の註釈に「酢屋傳左衛門先祖之親」とある。

「廻間」は田楽村の中の地名である。

### 過去帳②、迫間清六

「迫間」は、上の「廻間」と同じと考えられる。

### 過去帳③、清六弟

原本に名前の記載がない。新徳寺の註釈には「袋町酢屋傳左衛門先祖」とある。よって新八の子であり、清六の弟のいずれかであることがわかる。この人が初代傳左衛門のようだ。

### 過去帳④ 2代目酢屋傳左衛門

過去帳における「酢屋傳左衛門」の名の初出である。

名前から清六の弟3人のうち「傳左」の子ではないかと推測される。「名府下御園町」とも明記されている。

『健康とおいしさ マルカン酢360年のあゆみ』のp35には清六の子として養子に入ったと記載されている。しかし、寄進物の「大般若十六善神式幅」共には新八、清六弟、2代目傳左衛門の戒名が書かれている。清六の戒名がないのだ。過去帳と新徳寺の註釈からも、養子入りしたのは清六の家系ではなく、清六の弟の家系のような。二代目傳左衛門は、その名前から「傳左」の子と推測され、傳左は「新八の子」として養子入りしたことになる。註釈の「袋町酢屋傳左衛門先祖」は、田楽で酢の醸造を始め名古屋の袋町に出て行ったことを示していると思われる。

ただし、注意したいのが原本にはそれらについては何も書かれていないということだ。そして、息子がすでに3人いる家に、名古屋の商家から加えて養子として入るものなのかという疑問が残る。そうであるならば、二代目傳左衛門こそが養子入りした傳左衛門自身であって、清六弟（傳左）の子として入ったのではないかという推測が成り立ちそうだ。この点については今後の研究を待ちたい。

